幻の探偵作家を求めて 完全版 上

目次

はじめに（晶文社版　序文）　7

1　ファンタジーの細工師・地味井平造　13
2　ルソン島に散った本格派・大阪圭吉　27
3　深層心理の猟人・水上呂理　37
4　海恋いの錬金道士・瀬下耽　47
5　雙面のアドニス・本田緒生　57
6　凩（こがらし）を抱く怪奇派・西尾正　68
7　国鉄電化の鬼・芝山倉平　79
◎　探偵文壇側面史　編集長交友録　88
◎　幻の作家を求めて・補記　思い出すままに　99
8　「蠢く触手」の影武者・岡戸武平　101
9　べらんめえの覆面騎士・六郷一　112
10　気骨あるロマンチスト・妹尾アキ夫　122

11 錯覚のペインター・葛山二郎 133
12 暗闇に灯ともす人・吉野賛十 144
13 含羞（がんしゅう）の野人・紗原砂一 155
◎ 探偵作家尋訪記追補 164
14 〈不肖〉の原子力物理学者（ニュークリアフィジシスト）・北洋 166
15 アヴァンチュウルの設計技師・埴輪史郎 173
16 夢の追跡者・南沢十七 184
17 ミステリーの培養者・米田三星 195
18 一人三役の短距離ランナー・橋本五郎 215
19 乱歩の陰に咲いた異端の人・平井蒼太 222
20 豪雪と闘う南国育ち・蟻浪五郎 231
21 ロマンの種を蒔く博多っ子・赤沼三郎 240
22 セントラル地球市の名誉市民・星田三平 251
◎ 『幻の探偵作家を求めて』の作者を求めて
鮎川哲也氏に聞く（取材・構成　東雅夫）

鮎川哲也アンソロジー解説集1

下り〝はつかり〟解説　268
急行出雲　解説　289
怪奇探偵小説集　解説　318
怪奇探偵小説集・続　解説　332
怪奇探偵小説集・続々　解説　346
鉄道推理ベスト集成　第1集　解説　360
見えない機関車　解説　378
鉄道推理ベスト集成　第2集　解説　392
恐怖推理小説集　解説　413
鉄道推理ベスト集成　第3集　復讐墓参　解説　426
鮎川哲也の密室探求　解説　444
鉄道推理ベスト集成　第4集　一等車の女　解説　465
『幻の探偵作家を求めて 完全版 上』編者解題　日下三蔵　479

はじめに（晶文社版　序文）

ミステリー界の盛況は推理作家のわたしですら驚くほどである。ポルノまがいの小説から暴力小説にいたるまでミステリーの名を冠するのは、雑誌社もしくは出版社の営業政策からくるもので当の作家のあずかり知るところではなく、読者としてべつに目鯨をたてるほどのこともあるまいが、昨今のこの隆盛が一日にして成ったわけでは勿論ない。戦前のミステリーがまだ探偵小説と呼ばれていた時代に、多くの先人たちが、ただただミステリーを愛するがゆえに、稿料なんぞは度外視して書き綴った。こうした人々が日本のミステリーの基盤をきずいた功績を忘れることはできないが、大半がプロ作家ではなかったために写真一枚すら読者の眼にふれる機会はなく、今日ではその経歴を明らかにする手だても失われつつある。いまのうちに何とかしておきたいという思いは、つねづねわたしの念頭を去らなかった。

消息不明となった作家は戦前派ばかりに限ったものではない。探偵小説が推理小説と称されるようになってから登場した新人たちのなかにも、そうした余技作家が何人かいる。さいわいにも所在が判明したこれらの人々も、取材の対象としてインタビューを試みた。が、例えば本間多麻誉氏の如く《猿神の贄》その他記憶にのこる作品を書き、雑誌のグラビアに顔写真も載っていながら、氷川瓏氏と新橋駅の近辺でヒョッコリ出遭ったのを最後に、まったく消えてしまった人もいれば、顔を合わせれば親しく語り合った故弘田喬太郎氏の場合のように、係累者の所在がどうしてもつかめなくて半ば絶望視しているようなケースもあるのである。

推理小説専門誌「幻影城」が発刊され、島崎博編集長から挨拶の電話があったとき、わたしはすかさず消えていった余技作家たちの探訪を持ちかけると、面白い、その企画を貰いましょうという返事を得た。即決であった。のちに探訪ではなくて「尋訪」ということになったが、これは島崎氏が中国の古典のなかから発見してくれたものである。

戦前の読者はべつとして、「幻影城」の若い購読者のうち果して何人がこの企画に関心を示してくれるか大きな疑問であった。しかし中途で打ち切ることもなく、一貫してわたしの「尋訪記」を載せてくれた編集長に謝意を表さなくてはなるまい。「幻影城」が休刊になった後、年に二回という約束で「尋訪記」を掲載してくれた「問題小説」の真矢正弘氏にも、この機会にお礼を述べなくてはならないだろう。坪田宏氏未亡人や星田三平氏のご遺族を訪問しようと考えているうちにわたしが病気にかかってしまったために、平井蒼太、蟻浪五郎の両氏をとり上げたきりで中絶することになったのは遺憾だが、専門誌でもない一般の雑誌がこうした記事を載せるのは、かなりの冒険であったに違いないのである。

ごくわずかの例外を除くと、大半の人が取材の申し入れに快く応じて下さった。月に一度のこの仕事を、島崎氏とわたしは楽しみに待つようになった。しかし、そうそう都合よく作家の消息がつかめるものでもない。ときには「尋訪記」が掲載されぬ号もあったが、いま振り返ってみるとその理由は、取材対象の人の所在が判らなかったためではないか、という気がする。かなりの歳月が経ってしまったので、その辺になるとわたしの記憶もいささか曖昧になってくる。そうしたこともあって、毎回この「尋訪記」は、目指す作家の消息をどうやってキャッチし得たかということからスタートしている。小学生に遠足の作文を書かせると、必ず校庭を出発するところから始まるといわれているが、本稿がそれに似ていることを思って、書きながらときどき苦笑する場合があった。

かつて本書は「幻影城」の出版元から刊行される予定になっていたため、わたしは雑誌に載った自分の文章に朱を入れる一方、各作家に申し入れて記述のなかのミスの指摘を受け、同時に顔写真と署名とを編集部あてに送ってくれるよう依頼した。だが突然の休刊に遭ってこれらの資料はすべてが所在不明になってしまったのであった。今回あらためて晶文社から刊行されるに際して、各氏に対して同じことを再度お願いしたにもかかわらず、すべての人々が嫌な顔一つせずに応じて下さったことにもお礼を申し上げたい。

戦前から戦後にかけて息のながい創作活動をされた渡辺啓助氏が、書と鴉の絵をよくされることは文中でも触れたとおりである。もう少し具体的に記せば、氏が《偽眼（いれめ）のマドンナ》で「新青年」に登場したのが昭和三年の六月号であって、地味井平造、本田緒生、葛山二郎、瀬下耽、橋本五郎の諸氏は渡辺氏の先輩作家になる。こうしたことから、

本書の装画をお願いするのに最適な方ではないかと考えたのだったが、快諾して下さったのは感謝に堪えない。

本書の如き地味な内容の本は売れゆきもたかが知れているものだから、幾つかの出版社に話を持ち込んではそのたびに断わられてきた。しまいにはわたしも諦めていたのだが、昨秋ひょんなことから講談社の白川充氏にぶっつけてみたところ、各作家の代表短篇をはさんで文庫本で出してみようという願ってもない返事を得たのだ。ところが縁遠い娘にいきなり縁談が重なって来ることにも似て、晶文社のほうからも松村喜雄氏を介して出版の打診があった。このほうはハードカバーになるというので、はなはだ勝手ながら白川氏には諒解を願って、こちらに乗り換えた。なんだかわたしは先程からペコペコと頭を下げどおしのようである。わたしの我儘を非難せずに、晶文社から本になることを喜んでくれた白川氏に対してもやはり頭をさげねばなるまい。ともかくこの一巻は沢山の人々の好意によって出来上がった。

珍しくもない偶然だが本書を担当してくれた晶文社の編集者も島崎姓である。したがって読者のなかには読んでいて混同する人もいるだろう。が、「幻影城」の島崎博氏がわたしよりも小柄であったのに反して、晶文社の島崎勉氏は見上げるような長身だ。わたしは原稿を渡すと氏を誘って声楽のリサイタルへ出かけたものだが、電車やバスに乗るたびに入口で頭のてっぺんをぶっつけて、痛い痛いを連発していた。だから幾らわたしが慌て者でそそっかしくても、島崎博氏と島崎勉氏とを取り違えるようなことは絶えてないのである。どうか読者もお間違なきよう。

1　ファンタジーの細工師・地味井平造

（一）

戦前のことになるが、春秋社より江戸川乱歩氏の編纂により「日本探偵小説傑作選」が刊行された。編者はこのために長い序文を書きおろし、それは当時の日本探偵小説界を概括的に鳥瞰した労作で、いまもって高く評価されている。わたしはこの長序によって地味井平造という変った名の作家と、《煙突奇談》という代表作のあることを知った。そして何とかして一読したいと思った。だがその頃の地味井氏は筆を折っており、《煙突奇談》も滅多に再録される機会がなくて、それ以来わたしにとって地味井氏は幻の作家であり《煙突奇談》は幻の作品であるということになった。

この短篇は、戦後になって「別冊宝石」でも紹介され、さらに講談社の「大衆文学大系」に採られている。だが、本を購（あがな）うほどの金銭的余裕にとぼしかったわたしの目に、それらが触れるわけもなかったのである。そして一昨年（一九七三年）のこと、「小説推理」が別冊で瀬下耽、西尾正、葛山二郎氏らの旧作を集めた特集号をだしたときに、わたしは三十数年ぶりでようやく《煙突奇談》とめぐり会えたのだった。それは世評どおり質のいい短篇であり、これでわたしの憧れの一端は果たされることになるのだが、作者についての紹介が省かれているものだから、地味井平造という人物については依然として知るところがなかった。わたしにとっては、この地味井平造という曰くあり気な、そのくせ安定感のあるペンネームからして謎であった。変っているという点では女銭外二氏と双璧をなしており、いつかはこの不思議な、と同時にひどく印象的な筆名の由来を明かしたいものだと念じて

いた。
「幻影城」の島崎博編集長とのあいだで、消息を絶った作家を捜し出してインタビューをしようではないかというわたしの提案がまとまったときに、わたしがまず第一に地味井氏の名をあげた裏面には、右にのべたような理由があったのである。
「問題は住所だが……」
地味井氏訪問が本決まりになると、電話口でわたしは心細気にいった。
このシリーズが年季の入った探偵小説読者から歓迎されるであろうことは間違いない。が、わたしと編集部には、毎回、消息不明の作者の居所をつきとめるという難問がつきまとうことになるのである。
「その件はぼくに委せておいて」
自信あり気に島崎編集長は答えた。
「地味井さんは牧逸馬氏の弟さんだからね、牧氏の未亡人か末弟の長谷川四郎氏に訊けばわかる筈です」
早速そちらのほうに問い合わせてみるから……。編集長はそういって電話を切った。じつをいうとわたしは、彼のいまの話によって、地味井平造と牧逸馬の両氏が兄弟であることをはじめて知ったのだった。と同時に、目から鱗がおちたように「地味井」の謎が解けた。
林不忘のペンネームで丹下左膳や釘抜藤吉などの時代小説を発表し、日本中の読者を熱狂させた牧逸馬氏は、一方では谷譲次の筆名を用いて、アメリカを舞台にした小気味よい数々の短篇を書いていた。この牧氏がジョージを名乗るからには、弟が自からをジミーと名づけても不思議はないではないか。地味井はジミーだ、とわたしは直感した。
このわたしの解釈が間違っていなかったことは後で触れる機会があると思うが、どう首をかしげても解らないのは「平造」のほうであった。後で気づいたことだけれども、この謎を解くキーはわたしの目の前にぶらさがっていたにもかかわらず、迂闊にもそれを見逃していたのである。

（二）

「水谷準君はどうしています？　元気ですか」
開口一番、地味井氏はそう訊ねた。そこには旧友を懐しむ心がこめられており、私はこの一言で地味井氏があたたかいハートの持主であることを悟った。じつは、地味井氏が気むずかしい人ではあるまいかと取越し苦労をした島崎編集長は、この会見がうまくいくかどうかを心

す」

帰国したこの長兄はアメリカ風の生活様式を持ち込んだ。服装から食事から日常会話にいたるまでがアメリカ式であった。彼の口からは頻繁にアメリカの俗語がとびだし、そのくせ、可愛いい弟がその真似をすることを恐れるように、「いまのは悪い言葉だから喋ってはいかん」と注意をしてくれるのである。

「この兄がぼくのことをジミーと呼ぶのですよ。本人のぼくはジミーなんていわれることに抵抗を感じているんですが、そのうちに周囲の人までがジミーさんと呼ぶようになる。松本恵子さんは二十歳を過ぎたぼくをジミー少年といっていましたね」

予期せぬところで松本恵子さんの名がでてきた。松本女史は「探偵文芸」を主宰した探偵作家松本泰氏の夫人であり、クリスティその他の小説の翻訳で知られていた。

「兄とぼくが借りた家の大家(おおや)さんが松本泰氏なのです。……恵子さんは元気でしょうか」

「多分、横浜でご健在ではないかと思います。いずれ、松本泰氏のことを伺うために、お訪ねする予定でございますが……」

「お会いしたら、ぼくから宜敷(よろし)くとお伝え下さい」

地味井氏はなつかしそうにいった。

この機会に作者の交友関係に触れておくと、地味井氏と探偵作家との交流は殆どなかった。江戸川乱歩氏とも会わずじまいであったという。唯一つわたしが興味を感じたのは、氏の個展を、水谷編集長に連れられて久生十蘭氏が見に来た、ということだった。久生氏もまた函館の産なのである。

(三)

このインタビューの冒頭で思わぬ失敗を演じた。部屋にとおされ、炬燵をすすめられたところで、おもむろに「物故作家の地味井氏につきまして……」と切り出したら、隣りに坐った藤田嗣治画伯にどことなく似ている紳士が、「わたしが物故した地味井君です」と自己紹介されたので、わたしは奇蹟に遭ったようにびっくりした。さまざまの理由から、地味井平造がてっきり亡くなったものとばかり思い込んでいたことがしくじりの原因になるのであった。だからわたしは、この紳士は地味井夫人の弟さんか何かで、今日のインタビューの介添役として同席されたものであろうと、勝手に解釈していたのである。

数えてみれば、「物故させられた」作家がわたしの知

「観光列車Ⅴ12号」――香山　滋

本名が山田鉀治。明治38年7月に東京の牛込で生まれた。法政大学に学び、大蔵省に勤務した。

昭和22年の旧「宝石」に《オラン・ペンテクの復讐》を発表して、一躍流行作家となった。氏の作品は異郷を舞台にとり好んで太古への郷愁を描いたものが多かったが、社会派推理小説がもてはやされるのに反比例して作品の数が減っていった。昭和50年2月に死去。

この一編は「探偵倶楽部」26年2月号に載った。

観光列車ヴィクトリア号というものが本当に走っていたのかどうか、寡聞にして編者は知ることがない。しかし香山滋のような空想力のゆたかな作家の作品についてそうしたことを詮索するのは、野暮の骨頂というものだろう。いまと違って海外旅行が日常化していない時代に、作者は、地球上のあらゆる土地を舞台にしたばかりでなく、火星のことまで書いているのだから――。これは私見に過ぎないのだけれど、氏の場合、国外旅行が自由でなかったから、したがって実際に外国を旅したことがなかったから、思うがままに空想をふくらませることが出来たのではなかったろうか。

氏は旧「宝石」短編コンクールの第一期生であった。このときは、探偵小説が書きたくて腕を撫していた新人がチャンス到来とばかり殺到したため秀作が多く集って、同誌のコンテストのなかでは最も稔りがあったといわれている。そのうちでも香山滋は島田一男氏と並んで、当選した時点ですでにプロ作家たる実力を具えており、事実、忽ちのうちに両氏とも引く手あまたの多忙作家となった。思うに香山作品が歓迎されたのは、香山版動植物辞典にしか記載されていない奇妙な動物や不思議な植物が登場する珍しさと、敗戦に依る混乱で夢を失った人々に夢見ることの楽しさを教えてくれたためではなかったか、と思う。

氏とは推理作家仲間のパーティで一、二度口をきいた程度だから、親しい仲では勿論なかった。しかしそのわたしですらも、氏が推理小説の世界から退場していったことを残念に思い、訪ねて来た編集者にときたま「香山さんはどうしていますか」と訊いたりすることがあった。だが、消息につうじている筈の彼等からさえも満足な返事を得られないのが常だったのである。余技作家ならともかく、本業作家の、それも売れた人であっただけに、時流に合わずして筆を折った淋しさはひとしおだったろうと思う。

【著者】**鮎川哲也**（あゆかわ・てつや）
1919 年、東京生まれ。GHQ 勤務の傍ら創作活動を行い、のちに専業作家となる。晩年は新人作家発掘にも尽力した。2002 年没。長編作品の主要著書に『黒いトランク』、『憎悪の化石』、『黒い白鳥』（いずれも講談社）、『りら荘事件』（光風社、別題あり）、『白の恐怖』（桃源社）、『風の証言』（毎日新聞社）、『沈黙の函』（光文社）、短篇集の主要著作に『海辺の悲劇』（弥生書房）、『薔薇荘殺人事件』（講談社）、『赤い密室』（サンケイ新聞社）など。第 13 回日本探偵作家クラブ賞、第 1 回本格ミステリ大賞特別賞を受賞。

【編者】**日下三蔵**（くさか・さんぞう）
1968 年、神奈川県生まれ。出版社勤務を経てミステリ評論家、フリー編集者。著書に『日本 SF 全集・総解説』（早川書房）、『ミステリ交差点』（本の雑誌社）。主な編著に《山田風太郎ベストセレクション》（全 24 巻、角川文庫）、《ミステリ珍本全集》（全 12 巻、戎光祥出版）、《日本ＳＦ傑作選》（全 6 巻、ハヤカワ文庫）、《横溝正史ミステリ短篇コレクション》（全 6 巻、柏書房）など。編著『天城一の密室犯罪学教程』（日本評論社）で第 5 回本格ミステリ大賞を受賞。

幻の探偵作家を求めて 完全版 上
論創ミステリ・ライブラリ　1

2019 年 6 月 10 日　初版第 1 刷印刷
2019 年 6 月 20 日　初版第 1 刷発行

著　者　鮎川哲也
編　者　日下三蔵
装　丁　奥定泰之
発行人　森下紀夫
発行所　論 創 社
〒 101-0051 東京都千代田区神田神保町 2-23 北井ビル
電話 03-3264-5254　振替口座 00160-1-155266
http://www.ronso.co.jp/

印刷・製本　中央精版印刷
組版　フレックスアート

©2019 Tetsuya Ayukawa, Printed in Japan
ISBN978-4-8460-1693-7